

# つくりたくなる環境

## —図画工作 I の授業実践を通して—

木 下 藍

KINOSHITA Ai

## Environment produced by the will to create

### -Practice of drawing and handicrafts-

#### I. はじめに

本論文では、平成 26 年度末に T 大学短期大学部で行った図工室の教室環境の改善と、環境を生かした図画工作 I（平成 27 年度前期）の授業実践について記す。

幼稚園教育要領第 1 章総則、第 1 幼稚園教育の基本には、「幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする。」と記されている。また、「このため、教師は幼児との信頼関係を十分に築き、幼児とともにより良い教育環境を創造するよう努めるものとする。」<sup>1)</sup>とも書かれており、環境の創造は教師が一人で行うものではなく、子どもと一緒に築いていくものだと明示されている。保育所保育指針でも総則の中で「環境を通して、養護と教育が一体的に展開される」<sup>2)</sup>と書かれている。さらに、平成 26 年に告示された幼保連携型認定こども園教育・保育要領でも第 1 章総則にて「保育教諭等は、園児との信頼関係を十分に築き、園児が自ら安心して環境にかかわりその活動が豊かに展開されるよう環境を整え、園児とともにより良い教育及び保育の環境を創造するように努めるものとする。」<sup>3)</sup>と記されており、子どもと共に環境を整えていくことは保育者の重要な役割である。そのため、各園では様々な環境の工夫が、園全体で行われている。

保育者養成校での図画工作の授業も、同じように学生と教員が一緒になって環境を創造していくことが必要であると考え。しかし、筆者が図画工作 I で使用している教室（図工室）は、より良い教育環境を学生とともに創造していけるような場所とはいいがたかった。

筆者が担当する図画工作 I の授業では、造形に関する基礎的な知識、技能を、体験を通して学ぶことを目標にしている。保育者を養成するための場所が、創造的でなく、美しくないことは問題である。そこで、より良い環境の中で学生が作り出す経験ができるように教室環境の改善を図った。また、学生と共によりよい環境を創造していくことを目標に授業を計画した。

#### II. 改善方法

この章では、これまでの図工室の問題点と、具体的な教室環境改善方法について述べる。なお、教室の整理、改善は授業のない 2・3 月に計 10 日程度の期間を利用して行った。

## 1. 素材提示の仕方

図画工作 I では絵具やクレヨン、画用紙といった描画材のほか、生活の中にある身近な素材・廃材等を授業に用いる。なぜならそれらの素材は、実際に子どもたちが園の中で遊びに用いているものだからだ。空き箱や新聞紙、紙芯、カップ容器等の捨てられてしまうような廃材や、木の実や枝といった自然物も、図画工作 I では積極的に使用している。

あらゆる描画材や素材は図工準備室に整理され、ストックされている。平成 26 年度の授業では、それらの様々な素材は、授業の際に筆者が選別し、図工室まで運んでいた。しかし、この方法では教員が制作の素材をある程度限定してしまうという問題があった。そこで、教室内の棚を整理し、素材を種類別に分類しておくことのできる「素材コーナー」(図 1)を作った。素材を箱の中に入れておくことで、必要な素材ごとに箱をとりだすことができる。



図 1 素材コーナー

また、素材を並べるうえで「見せ方」にもこだわった。創造的体験によって子どもたちの個性を育む幼児教育の実践を行っているイタリアのレッジョ・エミリア市ではレミダという、廃材を集める施設がある。市の学校の先生はレミダで廃材をもらい、素材として子どもたちに提供する。それらの素材は素材や色、形などによって分類され、美しく並べられている。ただ並べるだけでなく、教師やアトリエリスタの感性によって美しく整頓されていることで、子どもたちの感性を育み、創造意欲を引き出す効果があると考えられる。

図工室の素材コーナーも、学生の「これを使ったら何ができるだろう」という好奇心や、「〇〇を作りたい」という意欲を引き出すことのできる場所にしたいと考えた。素材は種類別に分類し半透明のケースに入れている。様々な形状、大きさの廃材は、収納していると雑多になりがちであるが、同一のケースに入れ陳列することで見やすく、使いやすくなった。ペットボトルや気泡緩衝材、段ボールといった大きな素材は、箱に入れても見えるように半透明のコンテナケースに入れて収納した。

## 2. 資料の見せ方 (藍文庫)

教室改善にあたって、これまではなかった本棚を設けた。学生は授業の前後や、授業中に調べたいことがあった時など、いつでもここで本を読むことが



図 2 藍文庫

できる。棚を「藍文庫」と名付け、子どもの造形に関する本や美術教育雑誌、絵本、画集等の本を収納した（図2）。特に、学生が普段自分では手に取ることが少ないであろう画集は、工芸から純粹美術、現代アートまで幅広く並べるよう心掛けた。それらの本は、幼児教育に直接関係がなくても、学生の好奇心を刺激し、美的感覚を磨くことに繋がると考えたためである。

実際に設置してみると、何人かの学生は本の存在に気づき、自ら本を読む姿が見られた。

### 3. 部屋の個性

保育室はそのクラスの担当保育者によって創意工夫がなされている。例えばT大学付属幼稚園では子どもたちの遊びごとに空間が緩やかに分けられていたり、子どもたちの造ったものが飾られていたりした。一方これまでの図工室は、石膏像が壁に飾ってあったり、イーゼルが置いてあったりはしたが、後は机と椅子があるだけで、寂しい印象のする部屋だった。

幼稚園教育要領第2章表現の内容の取扱いについて「豊かな感性は、自然などの身近な環境と十分にかかわる中で美しいものの、優れたものの、心を動かす出来事などに出会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、様々に表現することなどを通して養われるようにすること」<sup>4)</sup>とある。

図画工作Ⅰの授業でも、身近な環境の中で学生が刺激を受けたり、心を動かしたりしてほしいと考え、筆者なりの工夫を教室に加えた。例えば、室内に植物の鉢を置いたり、植物のリース（図3）を壁面に飾ったり、素材コーナーにも木の実や木材等自然のものを置くように心がけた。また、これまで廊下等に学生の作品を展示していたが、教室内に学生の作ったものが置かれることは少なかった。そこで、27年度からは学生の作ったものを、教室内を有効活用して飾るようにした。図4は図画工作Ⅱの授業で、あるグループが制作したフィンガーペインティング・染め紙

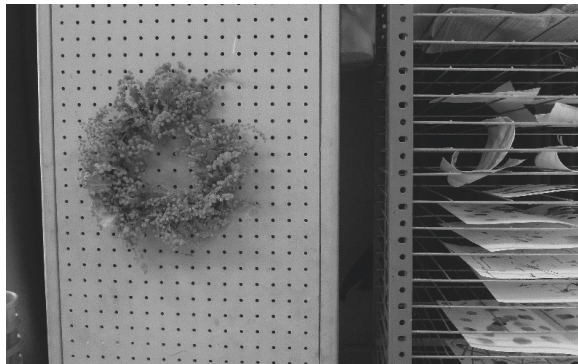


図3 図書館に咲いていたミモザで作ったリース



図4 学生の作ったフィンガーペインティング・染め紙

と染め紙である。この他にも、学生の作品は、本人が飾る場所を選択し、設置している。教室内に飾ることで、同じ授業時間の学生の作品だけでなく、他学年、他クラスの学生の作品も鑑賞でき、刺激を受けることができる。

以上のように、学生の刺激になったりヒントになったりする教室環境を、筆者だけでなく学生と共に作り上げることができるよう心掛けた。



### Ⅲ. 実践例

第Ⅲ章では、環境改善後に行った平成 27 年度図画工作Ⅰの授業実践について述べる。特に、環境を改善したことによって授業が変化したと感じる「1. 吊るせるものを作る (1 時間)」と、学生と共に環境を作っていた「2. 作りたくなる環境づくり (5 時間)」の実践について詳しく記す。

#### 1. 吊るせるものを作る (1 時間)

6 月の、夏を感じさせる時期に行った実践である。様々な素材や用具を使って、天井から吊るすことができるものを作った。授業時の環境は図 5 の通りである。学生が様々な素材の中から自分の作りたいものに合った素材や用具を選択できるよう、素材コーナーの箱を棚から机の上に移動させた。素材は、吊るしたときに風になびくようなもの、感触や色が季節に合うものを念頭に、自然物や人工物様々なものをそろえた。また、各素材に相応しい切断、接着の用具を体験し学べるよう、園の子どもたちの生活の中では使わないような用具も用意した。

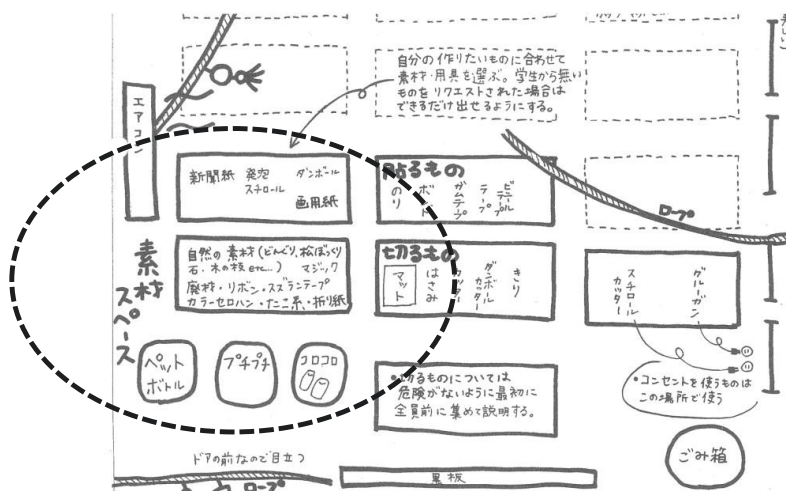


図 5 環境図 (学生に配布したプリントより)

初めに用具の取扱い方等を説明し、制作の時間に入った。素材を選択する段階では、学生は自分の作りたいものに当てはまる素材をじっくり考える姿や、様々な素材をまずは取ってみてその感じを確かめ、造形のヒントを素材から得る姿が見られた (図 6)。作る段階になると、学生は選んだ素材を工夫して組み合わせ、思い思いの吊るせるものを作った。多様な素材を用意しておくことで、試行錯誤を繰り返しながら独自の作品を作ることができた。



図 6 様々な素材を試しながら表現する

作品が出来上がると天井に張り巡らせている紐の好きな箇所に結んで実際に吊るした。天井に紐を張り巡らせたことも、教室改善の一つである。作品を「飾る」と言えば壁面装飾や、立体ならば置くことを考えがちであるが、より空間に影響を与える手立てとして、「吊るす」方法を考えた。中には、吊るしてみると素材の重みで落ちてしまうものもあったが、そういった失敗も学生にとっては一つの学びである。落ちてしまった学生は、何が原因だったかを思考し作り直していた。

4クラス分の作品が吊るされると、これまでとは全く違った教室の雰囲気になった（図7）。スズランテープやペットボトルなど、清涼感のある素材を選ぶ学生が多く、教室全体が今の季節に合う雰囲気となった。また、教室の様々な場所に吊るすと、窓からの風やエアコンの風等で作品が揺れ、動きのある立体物となった。

授業終了後も飾っておいたため、他のクラスの学生の作品を見て興味を持ったり、他の学年の授業にも影響したりした。「すごい!」「これは〇〇みたいだね。」等と自然と作品の感想を言い合う姿も見られた。



図7 できた作品を吊るす

「吊るすものを作る授業」では、初めに筆者が環境を作り、学生は其中で制作を行った。そして制作し、作品を吊るす段階になると、学生自身が環境を変化させている。

## 2. 学生自身による作りたくなる環境づくり（5時間）

図画工作Ⅰの後半、5回の時間数を使って、学生自らが「作りたくなる環境」を計画し、実践する活動を行った。これまでの様々な造形活動のまとめとなる。それまでは筆者が初めに環境構成を工夫し授業を行っていたが、この活動では学生自身が「作りたくなる環境」を作ることを目標とした。5時間の実践の内容を、教材研究・計画・実践・振り返りの4つに分けて紹介する。

### （1）教材研究（1時間）

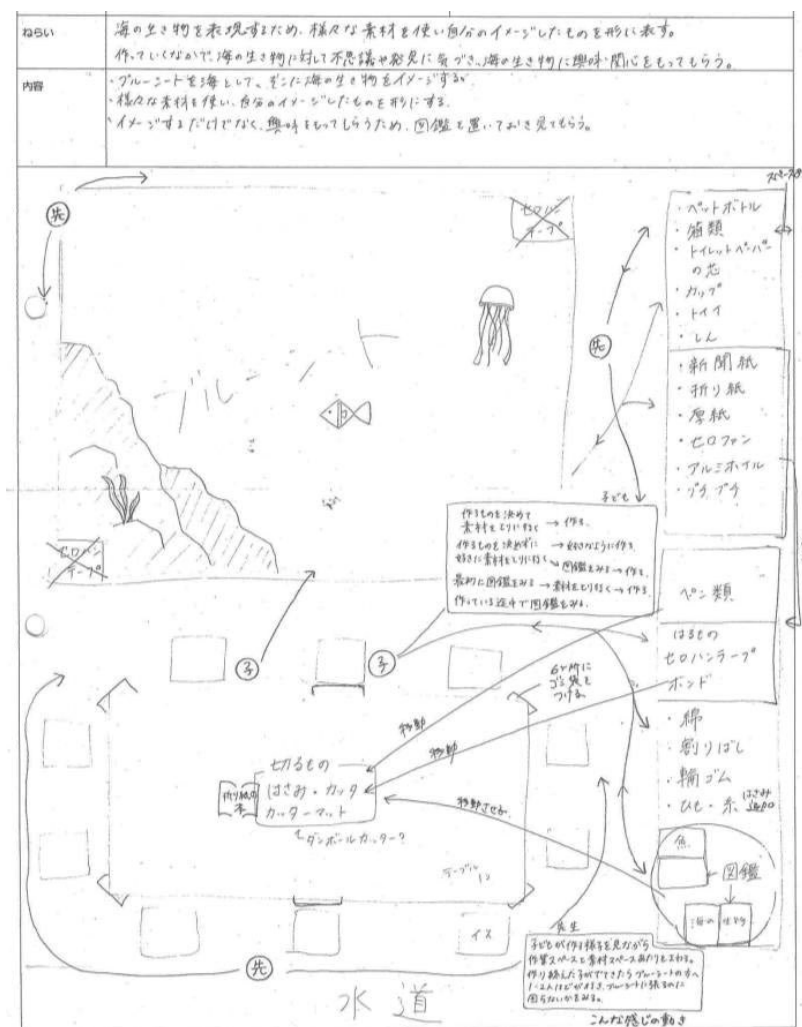
初めの1時間は、教材研究・話し合いの時間とした。学生は、4つのグループに分かれ、これまでの様々な素材を用いて描いたり作ったりしてきた経験を軸に、教材研究を進めた。「どのようなことを子どもに体験してほしいか」を出発点にして考え、それに適した素材、方法を実際に試しながら考えていった。

教材研究の際は画材（水彩絵の具・クレヨン・マジック・画用紙）や様々な素材、廃材がある程度出しておいたが、他に必要なものがあれば学生自身が用意するようにし、「環境を自分たちで作る」ということが意識できるよう意図した。

学生はこれまでの経験から、子どもに体験してほしい内容を考えていた。様々な素材を試し、経験から学んできたからこそ、考えが出てくるのだと感じた。

## (2) 計画 (1 時間)

教材研究をもとに計画書を作成する (1 年次前期の授業のため、指導案という言葉は使わず、計画書という言葉が授業内で用いた)。計画書の様式は、「吊るせるものを作る」で筆者が作った環境図 (図 5) と同じように、環境図の中に先生の動き、子どもの姿などを予想して入れる形にした。実習等では時系列に沿った指導案を描く場合が多いが、実習での学生を見ていると、造形の場合は特に、「〇分までにここまで全員できないと次に進めない」「時間までに作品を完成させなくてはならない」という考えに陥りがちである。そこで、時間ではなく空間や、人の動きを意識できるよう、環境図をもとにした計画を考えさせた。学生は、どこにどのような素材を置くか、その中で子どもたちはどのような考え・動きがあるだろうか、保育者としての自分はどのように援助すればいいのかな等を、グループで話し合っ作成した (図 8)。







り、作ったり、演じたり、遊んだりして楽しさを味わってほしい」と考え、ねらいとしていた。そして、教材研究の段階で、様々な素材がある中でも、カラービニール袋に注目した。そして、カラービニール袋の特性（大きく、被ることができる）から、洋服づくりをする子どもがいるかもしれないと予想し、服を飾れるようイーゼルを用意したスペースを計画した。実践の時間には自分たちでハンガーも持参し、教材研究の時間に作ったビニールのドレスを飾っておいた（図9）。

子ども役の学生が来るとそれをみて「私もあんなドレスが作りたい!」となり、複数の学生がドレス作りを始めた。憧れるプリンセスの衣装をまとう学生、友達とそろえて「お祭りの法被!」といい小物までどんどん作る学生等の姿が見られた（図10）。子どもの姿を予想したからこそ準備できた環境であり、その環境が子ども役の学生の創作にいい影響を与えた例だといえる。

また、計画の段階で予想していなかった遊びも生まれていた。ビニール袋に空気を入れて縛り、顔を描いて遊ぶ・ビニールの透明感を活かして海の世界を表現する・ほかの子ども役の学生が切ったビニールの切れ端が何に見えるか考え遊ぶ等の姿があった。保育者役の学生はそのような多様な表現方法に驚き、感心していた。グループの振り返りシートを見ると「子どもたちの発想力がすご

かった。」「子ども同士でコミュニケーションをとって様々な発想ができていてよかった。」等、子ども役の学生の発想に驚く記述が見られた。



図9 環境構成の様子



図10 実践の様子

#### (4) 振り返り（1時間）

最後の1時間は振り返りの時間とし、グループでのまとめとしてドキュメンテーションを作成した。ドキュメンテーションは、イタリアのレッジョ・エミリア市の乳幼児学校で行われている教育実践の柱の一つである。ドキュメンテーションについて、森（2003）<sup>5)</sup>は、「最終の『達成』や『結果を示すための記録』ではなく、『交渉する学び』の構成要素として、子どもたちの考えや発想を知り、深めていくための手法」と位置付けている。図画工作Ⅰの授業では、実践を行ったグループで模造紙1枚を使用し、写真とともに子どもたちの姿、学び、つぶやき等を自由にまとめ、「子どもたちの学びの物語」が他の人にも伝わるように作成するよう指導した。



学生は実践をドキュメンテーションとしてまとめることで、子どもの姿を振り返り、再考することができる。また、複数人で行った実践を1枚の紙にまとめることで、知らなかった子どもの素敵な場面や他の学生の考えを知り、共有することができる。完成したドキュメンテーションは、教室の外の壁面に掲示し、学内の誰でも見られるようにした（図11）。



図11 ドキュメンテーションの掲示

### Ⅲ. まとめと今後の課題

図工室を整理することで、学生が使いやすく見た目にも心地よい環境を生み出すことができた。特に、様々な素材を常時陳列しておくことで、学生が使用する素材の幅や、「○○を使ってみよう」という意欲が増加したように感じる。また、学生が普段から廃材などに注目し、家庭にある制作に使えるような廃材を学校に持ってきて、素材コーナーに自ら素材を提供することも増えた。また、学生の作品を飾ったり、学生自身が環境を計画したりすることで、教員だけでなく学生と共に環境を作り上げることができたと感じる。授業評価アンケートでは「この教室は作りたくなる環境でしたか？」という問いに対して平均点が4.40（136名回答、5段階評価）と、高評価を得ることができた。

そして、図工室内の環境を工夫し授業実践を行うことで、「環境を通して保育が行われる」ということに対して、学生は実感を持った理解ができたのではないかと考える。実践2では学生自身が「つくりたくなる環境」を計画し、実践することで、自分たちの作った環境が子ども役の造形に与える影響の大きさを感じただろう。

しかし、使いやすくなっただけのもの、「美しさ」「心地よさ」に関しては不十分な面もある。また、学生の姿や、授業の目的によっても環境はその都度構成しなおしていかなければならないものである。今後も図工室の環境改善を行い、授業に活かしていきたい。

### 引用文献

- 1) 4) 幼稚園教育要領解説 文部科学省 フレーベル館 2008年
- 2) 保育所保育指針解説書 厚生労働省編 フレーベル館 2008年
- 3) 幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説 内閣府・文部科学省・厚生労働省 フレーベル館 2015年
- 5) 森真理「レッジョ・エミリアからのおくりもの～子どもが真ん中にある幼児教育～」2003年